

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム  
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—  
報告書

マウドゥーディーの出版活動と思想  
—パキスタンにおけるイスラーム復興とウルドゥー語—

派遣者：須永 恵美子

派遣期間：2013年2月14日～2月28日

派遣先：マークフィールド高等教育研究所（イギリス）

キーワード：イギリス，イスラーム復興，マークフィールド高等教育機関，ウルドゥー語，出版

### 1. 研究課題について

派遣者の研究は、パキスタンの国語とイスラーム思想を担う出版文化がどのように拡大してきたか、宗教家マウラーナー・マウドゥーディー（1903-1979）の書籍を題材に、その史的展開を追うものである。マウドゥーディーは20世紀中盤にパキスタンで活躍したイスラーム思想家・政治家であり、150冊以上のウルドゥー語の著作を残している。具体的には、マウドゥーディーが出版物をどのように使い、何を広めてきたのかを問うため、宗教書を例にそのモノと思想コンテンツを明らかにする。さらに、宗教と言語がどのような関係にあるのか、ウルドゥー語の単語の選択をアラビア語、ペルシア語の関係性から実証する。以上の三段階を経て、ウルドゥー語のメディアに乗るイスラームの性質を問うことが、本研究の目的である。



写真 1: マークフィールド高等教育研究所正面

### 2. 派遣の内容

本派遣では、イギリスレスター州のマークフィールド高等教育研究所を訪問し、2014年に計画している臨地研究に向けての打ち合わせを行った。本プログラムの現地受入れ担当研究者であるアブドゥッラー・サーヒン教員の他、教育スタッフや事務スタッフとも面会をし、潤滑な研究を進める上での十分なサポートが受けられることが明らかになった。同研究所は海外からの研究者の受入にも積極的であり、研究室や寮といった研究所内施設のみならず、語学などの支援体制も整っていた。また、同研究所は派遣者が研究対象とするパキスタンの宗教思想家マウラーナー・マウドゥーディーに関連する資料をはじめとし、ウルドゥー語における優れた蔵書を所有していることを確認した。

### 3. 派遣中の印象に残った経験や体験

派遣者にとって、今回の渡航はマークフィールド高等教育研究所を訪ねる最初の機会であった。当研究機関は、教育、研究、出版の三部門から構成されており、マークフィールド村の近郊にキャンパスを構えているキャンパス内にはメインの教育研究棟の他に、図書館、出版局、男女別の学生宿舎、ゲストハウス、出版社、イスラミック・ファウンデーション研究所を抱えている。



写真 2: マークフィールド高等教育研究所研究棟

図書館は1階が英語、2階が雑誌、ウルドゥー語、アラビア語のそれぞれのセクションにわかれていた。図書館ではパキスタンとスリランカ出身の司書2名と会い、話を聞くことができた。図書館全体としては、新刊や貴重書などに偏ることなく、各年代の図書を積極的に収集しているという。図書館は夜まで開放されており、学生が遅くまで研究活動を行っていた。蔵書の傾向としては、イスラーム経済関係の書籍・雑誌が充実していた。

研究教育活動に加え、近隣の一般ムスリム（イスラーム教徒）に対してのコミュニティ活動にも積極的であることが印象的であった。マークフィールド村のあるレスターシャー州は、ロンドンとマンチェスターの間に位置しており、バーミンガムなどの移民が多い地域と接している。そのため、レスター市には、中華系、アフリカ系、アラブ系、トルコ系、インド系の飲食店や衣料品店が多い。街中を

歩くと、ロンドンなどに比べても明らかに移民の影響が大きいことが伺われる。このような地理的状況にあって、レスター市の近隣には移民1世、2世ムスリムや、イギリス人の改宗ムスリムが多数居住している。彼らに対して、市民講義や講習会という形でイスラームの知識をレクチャーしている。同研究所は特に、ムスリム・コミュニティのリーダーとなる若年層の育成に積極的であり、地域社会の中で共存するための教育活動を英語で行なっている。



写真 3: 附属図書館内部



写真 4: 出版局書籍販売部

#### 4. 目的の達成度や反省点

研究所は、イギリス本国を初め、欧米や中東、アジアなど、各地からの留学生・研究者を受け入れている。そのため、アカデミック・ライティングなど語学についての指導にもノウハウが有り、近隣の大学と提携してセミナーを開催していることなど、派遣者を受け入れるにあたっての体制が十分であることが確認できた。

派遣者の滞在は、マークフィールド高等教育研究所の休暇期間に重なっていたため、キャンパス内は比較的閑散としており、すべての教員・スタッフ・研究者と会うことが叶わなかった。特に、マウラーナー・マウドゥディーの元側近であり、世界的に著名な研究者であるフルスィード・アフマド教授は本国に帰国中であり、面会が叶わなかったことが残念である。しかし、派遣者の研究について理解を得、2014年に向けた研究協力体制を得るという目標は達成できたと言えよう。

#### 5. 今後の派遣における課題と目標

2014年度の派遣では、約6ヶ月の臨地研究を計画している。主な調査の計画は、イスラミック・ファウンデーションの研究施設内に研究室をもらい、成果発表のための論文を執筆することである。研究所内の研究会に参加し、これまでの議論の精緻化をはかる。その際、適宜、研究所附属図書館のウルドゥー語資料を利用する。

さらに、西欧での最先端の議論に触れ研究所のアニス・アフマド教授（社会学）、アブドゥル・ラシード・スィッディーキー氏（イスラーム経済学）、および研究所の所員らと意見交換、交流することを課題とする。これらの研究成果は英語論文としてまとめ、ウルドゥー語宗教書の分類とその現代的役割についての論文を国際学会しに投稿することを目標とする。